【ねがいましては】

平成２４年４月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第２５８号

「気は長く・・・」

３月末、京都での連盟の仕事が終わって翌日、中学時代の修学旅行で訪ねた『大徳寺 大仙院』に行くことができました。中学時代、そこでのご住職の一喝が強烈に印象深く、どうしても訪れてみたかったのです。

その方のお名前は尾関宗園さん。今はもう８０歳に手が届く高齢になられていても、相変わらず大きなお声でお話なさるのだそうです。

私たち中学生たちは枯山水を眺めることのできる庭園前に整列させられました。

「ハイ、女の子たちは前へお出で下さい。ホラッ、男ども、うしろへさっさと行きなさい・・・・。」

とにかく最初の、この扱われ方から口が開いたまま・・・。なんだこの坊さんは・・・。きれいに整列した後、「あのね、君たち、男と女で扱い方がずいぶんと違って感じたはずですが、私は男なので女が好きなんです。だから女の子にやさしくしたかった・・・。」

またしても「アラー・・・なんじゃこのお坊さんは・・・。」と同時に「この人、なんて正直な人なのだろう。」という爽快感を感じたのです。

そして全身を使ってのお説教が始まりました。その迫力にこころのすべてが釘付けにされたまま、「今やらないでいつやる！」その方は突然着ていた袈裟をぬぎ、それをポーンと投げ捨てました。「いいですか、ここに川が流れています。その川の中にあなた方の大切なものが落ちました。あなたならどうされますか、あの流れてゆく大切なものをどうやって拾おうかと考え続けますか、そうしているうちに、どんどん流されていってしまうのですよ。そうなんです。今すぐに拾いに行かなければずっとずっと遠くに行ってしまう。動くのは今なんです・・・・・今やらないでいつやるんですか・・・・・あなた方にとって、今やるべきことがあるはずです。今でしかできないことがあるはずです。それに全身をぶつけることこそが、生きるということなのですよ・・・・・。」

私の中に大きな空間ができるのと同時に、全身にジーンという稲妻のようなものが走るのを感じました。

「すごい・・・。」

修学旅行から帰って数ヵ月後、ふと本屋さんで目に止まります。「あの人の本だ・・・。」『不動心』と題した本。すぐさま購入、あの時の感動をまたまた思い起こすことができました。それから約４０年、その方に会えるかも、という小さな期待に胸ふくらませての訪問でした。残念ながら当日は大学への講義へお出かけとか、代わりに女性の方がわたし一人に丁寧にも院内を説明して歩いてくれました。そして、副住職をなさっている方にお会いすることができました。

その方に私の中学時代のその思い出をお話させていただくと同時に、今年、私の教え子の一人が小学校教員になったこと、昨年、先生は二人目のパパさんですと言っていてくれた子が亡くなったことなどをお聞きいただきました。丁寧にも私に向かって合掌されたのが深く印象に残りました。そして、目に止まったのが右の写真です。『気はながく　心はまるく　腹たてず　人はおおきく　己（おのれ）ちいさく』（上記のとおりやってこられたので今日の貴殿がございます。→台紙を収めた袋に書いてあります。）

私のこころに強くのこったのが、あとの（上記の通り・・・）の部分です。なんと小憎らしいのが、気は長く・・・の文面にこころを奪われるということは、常日頃よりその部分に執着する心があるからこそであること。そのようにつとめようと日々生活してきたのだと、あっさりと読まれてしまっています。やられた・・・・。尾関宗園さんの十中にしっかりはまっているわけです。これも良し・・・ありがとうございます。

さきほどの『不動心』という本も絶版になっているとすっかりあきらめてしまっていたら、しっかりそこにありました。表紙こそ変わっていましたが、中身は当事のまま・・・。もう４０年も前に手に入れた大切な本は、誰かに貸したまま、どこかへ行ってしまっていたので、再会できた喜びはくらべようもありません。

そんなこんなで、自らの生きてきた道筋の一場面に出会うことのできた１日でした。

出会い・・・人の生き様に変化が起こること。その出会いを私は今、ここで子どもたちを目の前にし実践しています。どこまで彼らを「今やらないでいつやる・・・。」の気持ちにできるのか。「あの人に会えてよかった。」と思っていただけるのか。そうさせようとは強く思いません。今を精一杯に生きる様を見ていただく。それでいいと思います。

相手に期待はしない。欲をぶつけるようなことはしない。しかし、「生きるってこういうことだと思うのですよ。」と、提案は、し続けてみたいのです。そんなこんなで、精一杯の日々をおくられているお子さんをご覧になって、幸せを感じない保護者の方はいないのではないでしょうか。

大仙院の方々、ありがとうございました。

そして毎回同じなのですが、ここに通う君たち・・・・・ありがとうさんね。